

K-705

天童市埋蔵文化財調査報告書第7集

谷地中・中堀遺跡

発掘調査報告書

1994

天童市教育委員会

序 文

本報告書は、天童市教育委員会が平成5年度に実施した、天童市谷地中・中堀遺跡の緊急発掘調査の成果をまとめたものである。

天童市では、市民生活の基盤整備を図るため、市道整備事業を推進しており、その一環として、歩行者の交通安全確保のため、歩道の整備を実施している。平成5年度の歩道整備事業の一つとして、市道谷地中・東根線の整備に取り組むことになった。

この工事区域の一部に、遺跡が含まれることがわかり、市建設部建設課の協力のもとに、天童市教育委員会が主体となって、緊急調査を実施することになったものである。

調査の結果、中堀遺跡は中世の遺跡であるが、それ以前の縄文時代晩期を主体とした集落跡であることが判明し、当時の精神文化や信仰の一端を示す土偶や石剣、それに生活用具である多くの土器類が見つかった。これらは、縄文時代晩期の人々のくらしや文化を解明していく上で貴重な資料になると考えられる。

また、このかけがえのない先人の貴重な遺産を、どのように後世に伝えていくかは、現在に生きる私たちの使命もあるといえよう。

最後に、調査員と調査にあたって御指導、御協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げ、報告書発刊の挨拶とする次第である。

平成5年12月

天童市教育委員会
教育長 横田 光正

例　　言

- 1 本報告書は、天童市建設部建設課の委託を受け、天童市教育委員会が実施した歩道設置工事に伴う「谷地中・中堀遺跡」（新規発見）の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、昭和53年山形県遺跡地図および遺跡台帳に登録されていない新規発見の遺跡である。平成5年発行の『天童の城と館』（天童市教育委員会・天童市旧東村山郡役所資料館）に中堀館（中世城館跡）として登録されている。
- 3 発掘調査は、平成5年12月6日、12月9日～12日に実施し、そのうち12月6日は事前調査を実施したものである。
- 4 調査要項は次の通りとする。

(1) 遺跡名	中堀遺跡（新規発見）
(2) 所在地	天童市大字川原子字中里4172, 字谷地中351, 353
(3) 地目	山林・畠地
(4) 調査体制	調査主体　天童市教育委員会 調査担当者　調査員　村山正市（明幸園職員・山形考古学会員・ 県中世城館跡調査員） 作業員　武口善九　渡部誠一　佐藤キミヨ　柴崎光子 事務局　天野英彦（社会教育課長）・矢野建史（同主幹） 長瀬一男（同副主幹・文化係長） 渡辺幸子（同主査）・尾原由枝（同文化財専門員） 調査協力　片桐　隆（市建設部建設課主査）
- 5 調査にあたっては、天童市文化財審議会副会長川崎利夫（日本考古学協会員）・山形県教育庁文化課より指導・助言をいただいた。（敬称略）
- 6 挿図縮尺は、住居跡・土壤1/25とし、遺物については、土器拓影図・実測図は4/5を基本としたが一部実物大、1/2を含み、石器実測図は1/2を基本としたが、一部4/5を含む。各図にスケールを示した。挿図・本文の記号はS—T—住居跡、E—P—柱、SK—土壤、F—遺構覆土、S—礫を示す。
- 7 本報告書の作成は村山正市が担当し、IIの「調査に至る経過」は、長瀬一男が執筆した。図版・挿図等の作成は、長瀬・渡辺・尾原が補佐し、編集は村山・長瀬・渡辺・尾原が行った。
- 8 出土遺物は、調査主体である天童市教育委員会が保管する。

目 次

I 遺跡の立地と環境.....4	IV 調査の結果.....10
1 遺跡の立地.....4	1 遺構について.....10
2 周辺の遺跡.....5	2 遺物について.....13
	A 土器.....13
II 発掘調査に至る経過.....6	B 土製品.....19
	C 石器・石製品.....19
III 調査の方法と経過.....7	D その他.....20
1 調査の方法.....7	
2 調査の経過.....7	V まとめ.....24

挿図目次

図1 遺跡の位置と周辺の遺跡.....4
図2 遺跡全体図.....5
図3 工事計画図.....6
図4 トレンチ・グリット配置図.....8
図5 遺跡の層序.....9
図6 遺構配置図.....9
図7 第1号住居跡実測図.....10
図8 第1号土壤実測図.....11
図9 中堀館外郭曲輪の土層断面図.....12
図10 土壤出土の土器拓影図.....14
図11 土壤出土の土器拓影図・実測図.....15
図12 土製品拓影図・実測図.....16
図13 その他より出土の土器拓影図.....17
図14 その他より出土の土器拓影図.....18
図15 石器・石製品実測図.....20
図16 石器・石製品実測図.....21
図17 石器・石製品実測図.....22
図18 石器・石製品実測図.....23

図版目次

図版1 遺跡遠景.....25
図版2 作業風景1、2.....25
図版3 土壌.....26
図版4 住居跡プラン.....27
図版5 出土状況(土壤).....28
図版6 出土状況(図4-28).....28
図版7 出土状況(図5~8).....28
図版8 出土状況(Cトレンチ断面).....29
図版9 Cトレンチ.....29
図版10 出土遺物(石器).....30
図版11 出土遺物(土壤).....31
図版12 出土遺物(Bトレンチ).....32
図版13 出土遺物(断面表土).....32
図版14 出土遺物(住居跡).....32
図版15 出土遺物(図24).....33
図版16 出土遺物(図1~9).....33
図版17 出土遺物(図27).....34

I 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地

天童市は山形県内陸地方のほぼ中央部に位置し、山形盆地の東部を占めている。東は東北地方を背梁する奥羽山脈が南北へ伸び、西は母なる川最上川を境界として寒河江市と接する。北は閑山を扇頂とする乱川によって東根市と接し、南は面白山を水源とする立谷川によって県都山形市と接する行政区画である。谷地中・中堀遺跡は市の北の境界となる乱川の支流蟹川が、奥羽山脈の大畠山（標高837.7m）、水晶山（標高667.9m）を水源として沢水を集めて流れる河川によって形成され、河岸段丘上に形成された遺跡である。

遺跡は天童市大字川原子字中里・字谷地中に位置し、地目は畠地あるいは山林となっているが、近年スーパー農道が造られ、天童カントリークラブゴルフ場が造成されて開発の波が押し寄せてきている。天童市内は、県内でも積雪が1m以下と少ない所であるが、この遺跡の立地する谷地中より奥羽山脈にかけ積雪が増大し、1.5m程になることがある。植生的には、ミズナラ林・ブナ林が茂り、その下方にアカマツが分布し、蟹川にはカジカ・ヤマメなどが生息し、昔は乱川の上流までサケやマスが上ってきたと言われている。動物では、ニホンカモシカやツキノワグマが生息しており、食料的確保面でも良好な地域であったと推察される。

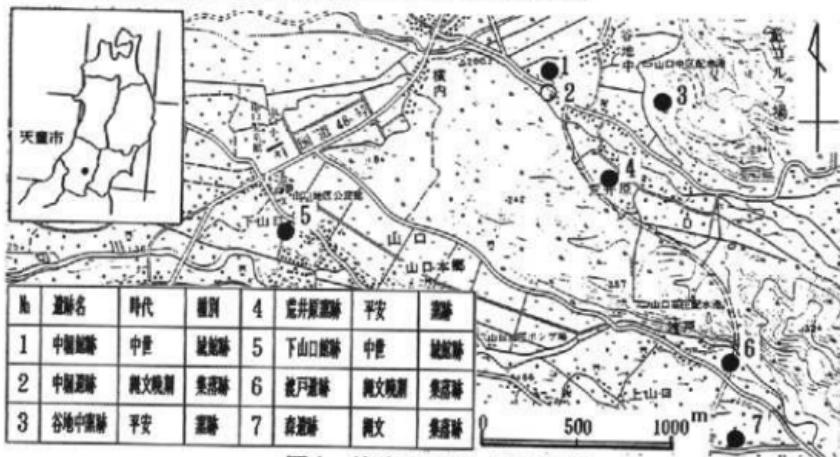


図1 遺跡の位置と周辺の遺跡

2 周辺の遺跡

天童市内には縄文時代後・晚期の遺跡も多く、8か所が登録されており、本遺跡の付近では大仏山を越えて山口地区の渡戸部落の東方に後期後葉から晚期大洞C式併行の土器や石器が出土する渡戸遺跡（6）、上山口地区東端の字「森」に所在する押切川の左岸段丘上の森遺跡（7）などの遺跡が立地する。同じように河岸段丘や丘陵に立地する遺跡として、天童市上荻野戸の宮田遺跡は雨呼山より続く丘陵上に、天童市奈良沢の白山堂遺跡は倉津川左岸に形成された遺跡で、晚期大洞B～C式併行の土器や石器が出土している。発掘調査がなされたものとして平野部ではあるが、天童市矢野目の矢口遺跡があり、昭和42年に遺跡一帯の土地改良工事が行われることになった。そのために発掘調査が天童市教育委員会によって実施され、晚期大洞B C・C式併行の住居跡3棟・甕棺墓1基が検出された。遺物としては、香炉型土器をはじめとする土器類や、石鎧・石剣などをはじめとする石器類が数多く出土している。

遺跡の立地する付近は平安時代頃より水晶山の信仰が盛んになった所で、本遺跡に平安末期から鎌倉時代頃に建立されたとされる谷地中の石鳥居が水晶山へ向かって立っている。2本の柱のみが残っているだけである。また、本遺跡の段丘は天童氏が敗退した後に、山口村の浅岡大炊之介と川原子村の滝口兵部が中心となり、屋敷に堀を掘って天正13（1585）年2月11日に再び一戦を交えた中堀館跡（1）もある。

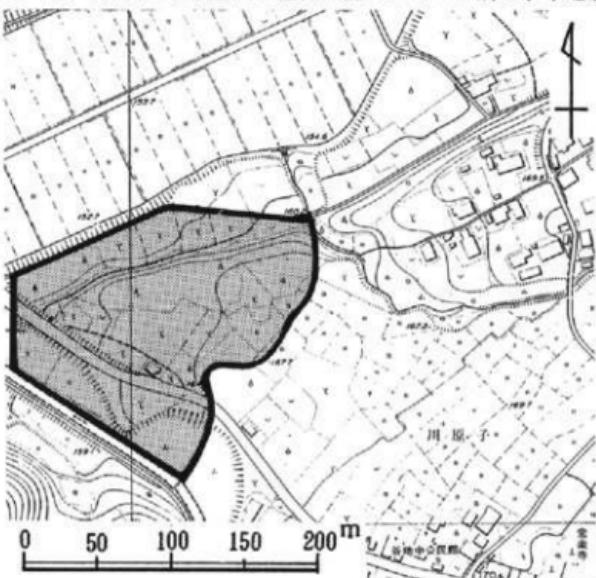


図2 遺跡全体図

II 発掘調査に至る経過

天童市では幹線市道整備の一環として、歩行者の交通安全確保のため、維続事業として歩道整備事業を行っている。天童市教育委員会では、文化財の保存・保護のために巡回調査を実施している。平成5年12月2日に、文化係担当職員が天童市山口地区谷地中地内の中世城館跡である中堀館周辺を調査中、谷地中地内で市道谷地中・東根線の歩道整備が実施されており、整備箇所が中堀館の一部と考えられることと、工事計画路線表土より土器片の採集ができたため、工事現場の責任者にその旨を伝え工事を停止した。

同日、事業担当課である市建設課及び山形県教育委員会と協議し、事前に緊急発掘調査を実施し、記録保存に資することで合意を得た。

平成5年12月3日、工事の期間が平成5年11月12日から平成5年12月25日までの工程で実施されていること、工事の内容、現場の状況等を踏まえ、調査指導者及び調査員と、調査の内容、方法等について打合せを実施した。

この結果、平成5年12月6日、12月9日～12月12日に調査を実施することに決まり、調査体制をつくり、文化財保護法第57条に基づき、天童市教育委員会が主体となって、緊急発掘調査を行うことになったものである。

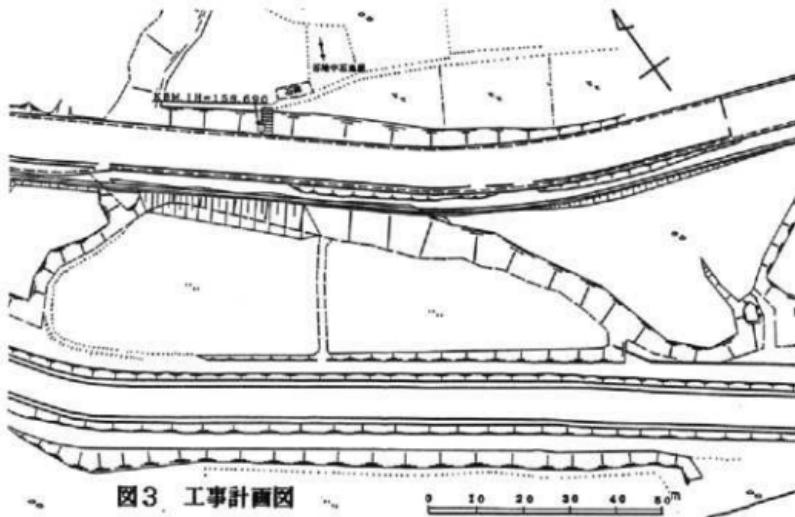


図3 工事計画図

III 調査の方法と経過

1 調査の方法

調査は歩道設置・U字管側溝工事の部分についてのみ行った。遺跡の総範囲は南北約150m、東西約200mであるが、今回の対象となった部分は、市道谷地中東根線の道路改良工事の際に残された幅2.5m、総延長302m、発掘面積755m²、である。調査の目的は、工事に係る場所に縄文時代の遺構が存在するか、遺物の出土状況はどうであるかを確認する。中世の館跡である中堀館の外郭であるために、その遺構の検出をして記録保存することに留意した。

調査の方法は、市道によって切断され残された段丘に幅1.5m、長さ5m（Aトレンチ）、幅1.5m、長さ4m（Bトレンチ）、段丘の状況を把握するために東西に断ち切る形（Cトレンチ）でトレンチを設定した。全体的にはグリットを配した。

工事途中での限られた調査期日で所期の目的を達成しなければならないために、表土は重機を使用し剥ぎとった上で、表土精査を実施しトレンチを設定した。トレンチは手掘り作業で進め、Cトレンチについては重機のみで掘り下げた。

その前に、事前調査という形で12月6日に坪掘の試掘を行い、12月10日に表面の遺物散布状態からの遺跡範囲確認調査を行った。

2 調査の経過

調査期間は平成5年12月6日、12月9日～12日とし、現地の調査は3日間で11日は雨天であったことと、工事計画等の都合により遺物洗浄等の作業を行った。12日は遺物整理作業を行った。

- 12月6日 現地にて遺物の状況を把握するために表面採取、試掘を行い、写真撮影を行う。
- 12月9日 重機によって表土の粗剥ぎを行い、トレンチを掘り下げ遺構確認を行う。ST1、SK1を検出、実測、写真撮影を行う。
- 12月10日 現地及び付近を踏査し遺跡範囲確認調査及び前日の残務を行う。
- 12月11日 市教育委員会事務局にて遺物洗浄等の作業を行う。
- 12月12日 市教育委員会事務局にて遺物拓影・実測・図面類の遺物整理作業を行う。

なお、12月9日のみ作業員の方々からの協力を得て行い、その他については調査員及び事務局が行った。現地での測量作業については市建設部建設課の協力を得て行っている。重機での作業は歩道設置・U字管布設工事の業者、株式会社矢萩組の協力で行われた。

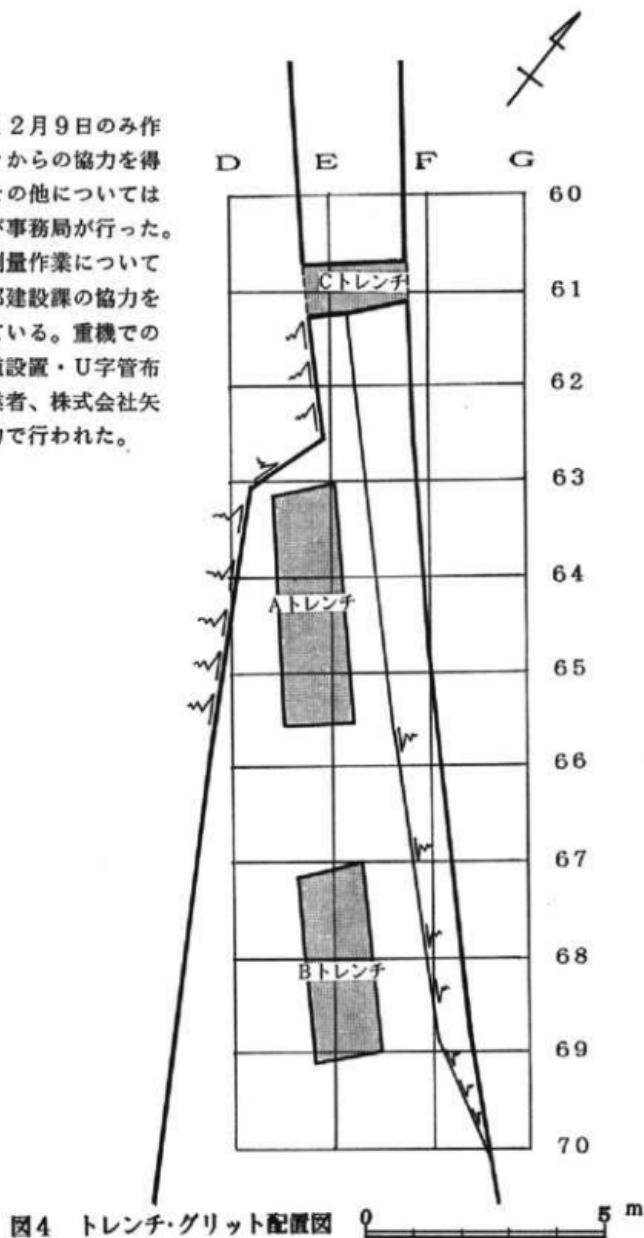


図4 トレンチ・グリット配置図

- I 粘土
II 褐色粘質土(ばさばさした土である)
III 嫌褐色粘質土

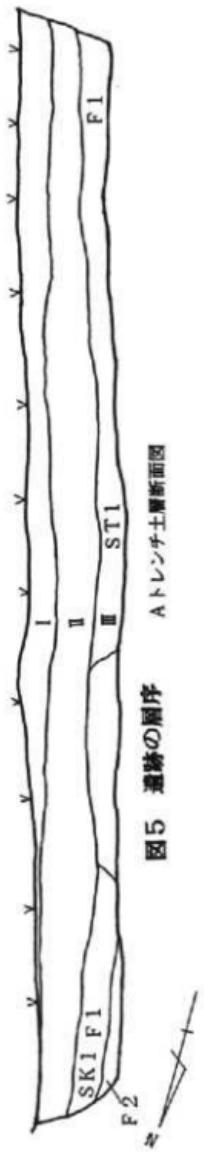


図5 遷跡の層序 Aトレンチ土層断面図

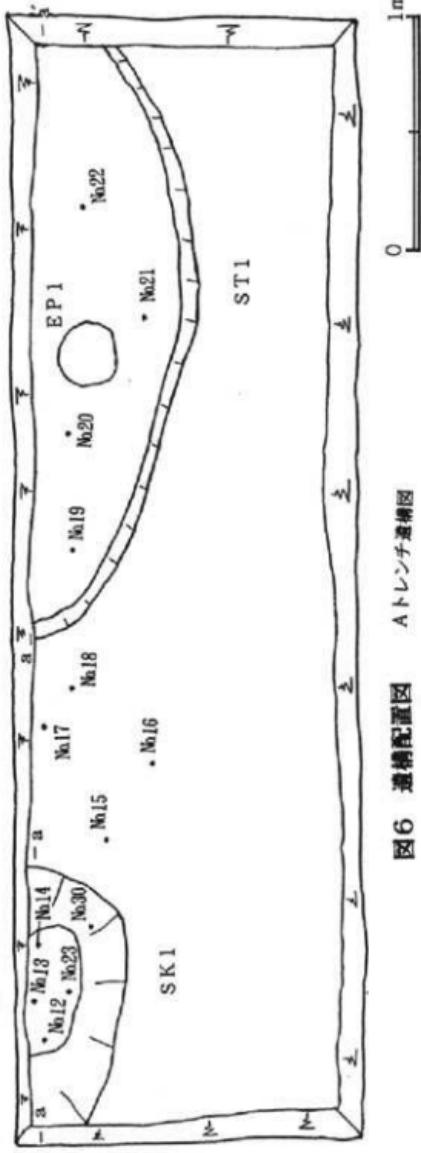


図6 遷跡配置図 Aトレンチ遺構図

IV 調査の結果

1. 遺構について

今次の調査で検出された遺構は下記の通りである。

縄文時代晚期 墓穴住居跡1棟 (ST 1)

土壌1基 (SK 1)

安土桃山時代 中堀館の曲輪の一部

a 第1号住居跡 (ST 1) 図7・図版4

Aトレンチの東端、中央より南へかけて検出され、平面形は円形を呈すると考えられる。東側にどのように広がるかは不明である。検出面はII層下面で住居跡のプランが確認され、III層を掘り込んでおり、壁面の立ち上りは20cm程であった。Aトレン

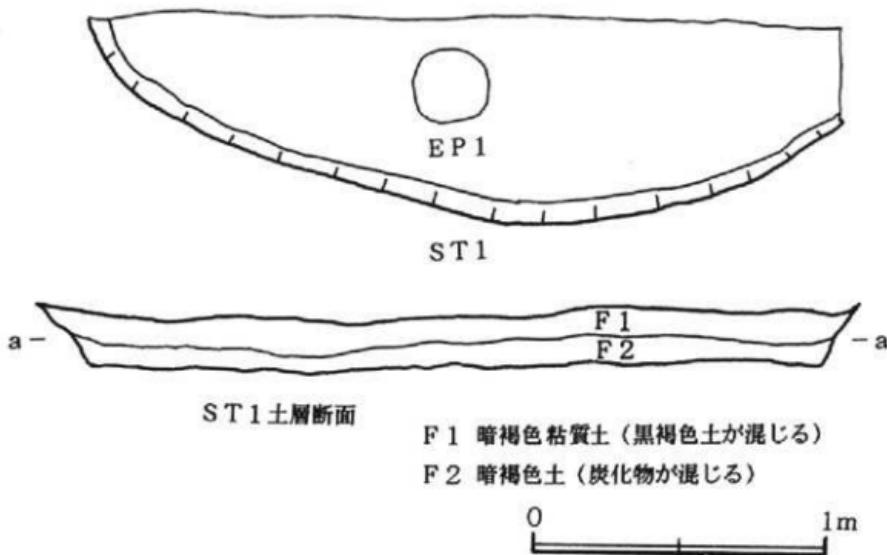
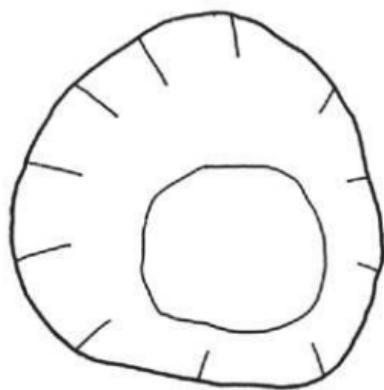


図7 第1号住居跡実測図

チ精査の段階で表土より40cm掘り下げた状態で検出され、覆土は土層断面で2層認められ、全体的にはほぼ平坦であった。貼床が認められて、部分的に礫がF2に混入し炭化物が混ざっている。F1とF2の土質は極めて類似しており、混入物にて分類している。F2下面でEP1の柱穴プランが確認されたが発掘していないため確かではない。炉跡は検出されないが、F2に焼土様のものが確かめられた。出土遺物はF2上面よりNo.19～No.22の大洞B～C式併行の土器が出土している。住居跡は以前の道路工事の際に破壊されたものと考えられ、西端だけが残ったものと思われる。

b 第1号土壤 (SK1) 図8・図版3

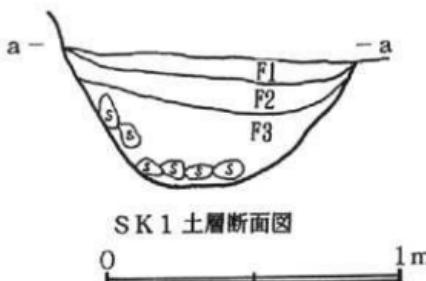
Aトレンチ北端から検出され検出面はII層下面である。平面形は橢円形を呈し長径130m、短径126cmで、最深部で土層確認面から46cmを計る。壁は南側でやや急に立ち上り、北側でやや緩やかに立ち上がる。墻底はほぼ平坦で底面に礫が散乱していた。トレンチ掘りで遺物の出土量が多いために、一部拡張して全面を発掘する。



SK1

図8 第1号土壤実測図

F1 黒褐色粘質土
F2 暗褐色粘質土
F3 暗褐色土
(礫と黄褐色の地山土
が混じる色)



SK1 土層断面図

0 1m

覆土の観察によれば3層からなり、F1の層位からNo.12・13・14・23・30の遺物が出土し、F2～3にかけて一括した土器片なども出土している。出土数は土器片が70片以上、土製装飾品1点、土偶2点、石器5点があった。一括した土器は粗製深鉢の口縁である。土器類から大洞B～BC・C式併行のものであろう。

c 中堀館の曲輪の一部 図9

表土を剥いだ段階において頂上部分が平坦になっており、東側から続く河岸段丘の延長となっており、石鳥居の建立されている面より約2.5m低くなっている。道路工事によって切断されているものの、中堀館の築造の際に河岸段丘を利用して平坦にした曲輪の一部であろうと考えられる。なお、段丘の状況を把握するために東西に断ち切って土層の断面を確認したところ疊を地山に乱雑に積み、その上に土をもってきて平坦としていることが確かめられた。

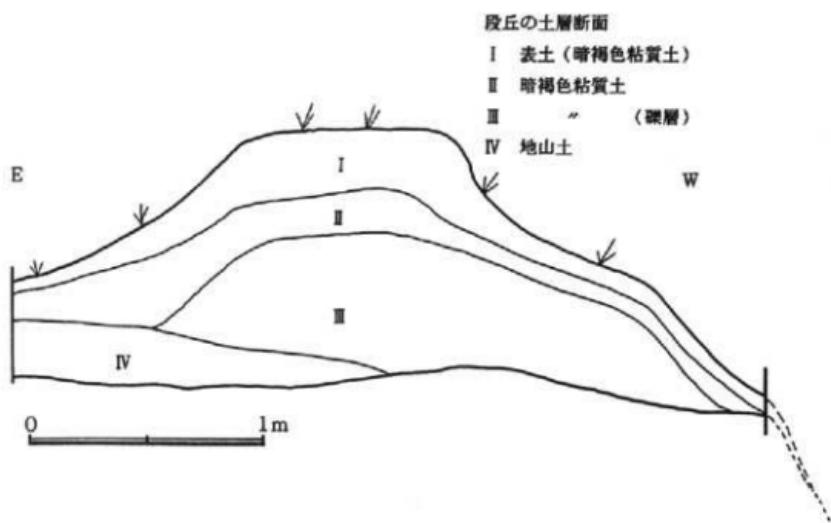


図9 中堀館外郭曲輪の土層断面図

2 遺物について

A 繩文時代の土器

今次の調査で出土した土器は、Aトレンチ及び遺物出土区を中心に整理箱にして約2,5箱程である。ここではこれらの中から、主として特徴的なものを抽出するにとどめた。体部破片については、小片も多いが挿図では省略し、部分的に図版で掲載した。

縄文土器には粗製の深鉢、精製の鉢・台付鉢などの器種がある。時期的には縄文時代晩期の土器の一群で文様等から分類することができる。

a 土壌出土の土器群（図10）

(1) 深鉢 a類

口縁部に文様帶のないいわゆる粗製土器である。口縁がやや内側に湾曲し、胴部へかけて自然にすぼまっていく。器面全体に横位の縄文が施されており、内面は継又は斜め方向の調節が施され、胎土、焼成状態もよい。器内面に炭化物らしきものが付着している。

(2) 深鉢 b類（図11—1・2・3・4）

口縁部に先端を尖らせた棒を工具にした大きめの刺突や、やや細目の刻み目が連続してみられる。刺突と刺突の間に平行沈線があり器面は良く磨かれている。図11の4は口唇に緩やかな波状が連続しており、口縁部に波状沈線があり、その下に沈線が二条続き、その間に刺突文がある。胎土・焼成状態も良い。羊歯(しだ)状紋を主体とする類である。

(3) 鉢（図11—6）

底部のみの出土が多く、全体の状況は不明である。拓影するまでもない小片であるが口縁部に羊歯状紋が施されたものもみられた。

(4) 台付鉢（図11—5）

台部のみの出土であって、無文で器面にミガキが施されている。

b その他の土器群（図13・図14）

(1) 深鉢 a類

口縁部に縄文がみられず、よく磨かれている器面に平行の太い沈線があり、貼付瘤が見られるのみの破片である。

(2) 深鉢 b類

口縁部に先端を尖らせた棒を工具にした刺突文と沈線、磨消部、沈線と刺突文がくりかえされている文様態をもつもの。

(3) 深鉢の地文

深鉢の地文は横位又は斜位に L R L 、或いは L (RL) をもつもので、縄文と縄文の間に S 字状の連鎖文が施されているものと、雑多に細い L (RL) の縄文や、R (LR) の横位縄文が施されているものとに区分できる。その多くは多節縄文で、深鉢の a-a 類が単節の乱れた縄文を地文としている。

(4) 浅鉢

浅鉢は体部の破片で C 字縄文帯と磨消帯が回るように広がるものである。浅鉢の破片は 10 点位で、壘形文全体の構成は不明であった。

図 10 土壌出土の土器拓影図



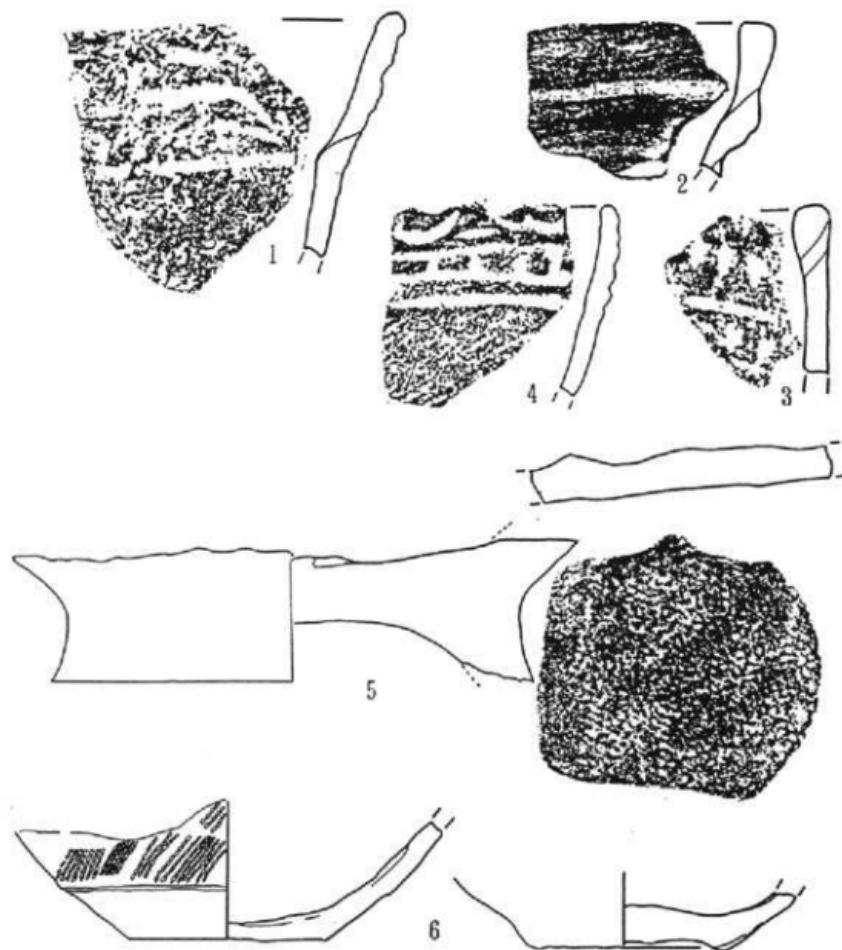


図11 土壌出土の土器拓影図・実測図



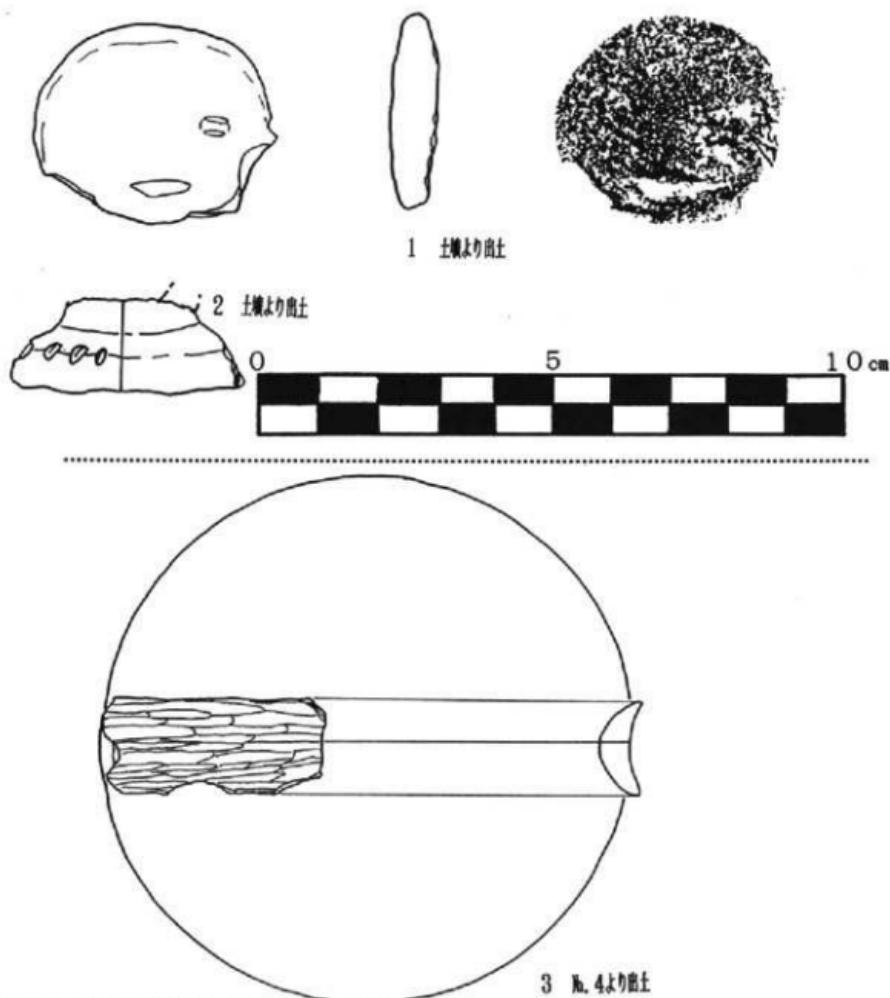
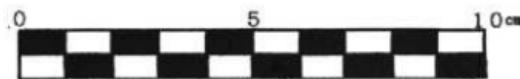


図12 土製品拓影図・実測図



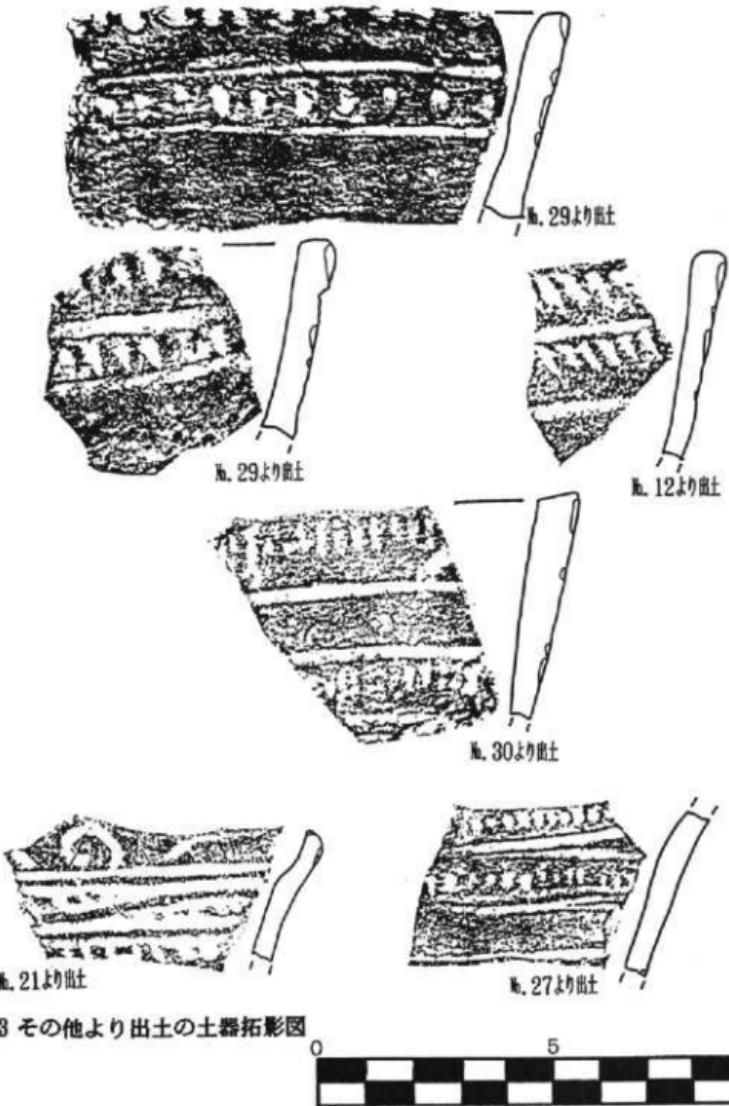


図13 その他より出土の土器拓影図



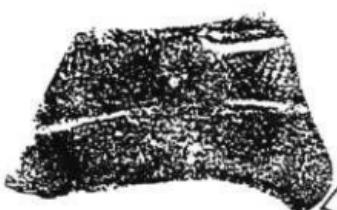


図. 10より出土

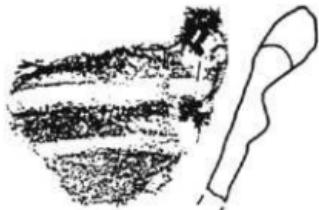


図. 13より出土



図. 8より出土



図. 29より出土

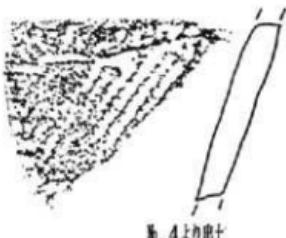


図. 4より出土

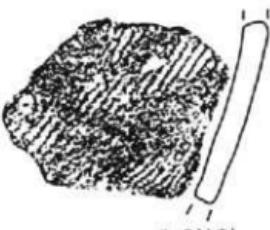


図. 6より出土

図14 その他より出土の土器拓影図



B 土製品

(1) 土偶(図12-1・2)

SK1より2点出土する。土偶の顔と足であろうと思われる。顔は4×3, 3cmで厚さ0, 6cmのものである(図12-1)。足は全体に3~4mm位で細い竹管文が施されている(図12-2)。

(2) 装飾品(図12-3)

№4より出土。大きさから考えて腕輪と思われる。外面にミガキをかけている。

C 石器・石製品

石器は18点出土し、打製石器、磨製石器、礫石器に大別されAグリットとAトレチ及びCトレンチ南側段丘より出土があった。

(1) 挖・削器(図15-1・2・3)

SK1より片面に加工が見られ、片面底部のみ加工された石核で自然面を残しており、加工途中で捨てられたものであろう。大きさは立の長さ9cm、最大幅5, 2cm、厚さ3, 2cmである(図15-1)。SK1より片面加工の未完成の削器と思われるものが出土している。自然面を残し長さ3, 8cm、最大幅5, 9cm、厚さ1, 0cmである(図15-2)。その他№15(図15-3)などから4点が出土した。材質は頁岩。

(2) 石剣(図16-1)

全体に直線的で断面が厚く丸みをもつ。欠損品で現存の長さ17, 4cm、幅3, 2cm厚さ2, 4cmで№50としたもので1点のみ出土。晩期初頭か。材質は粘板岩。

(3) 凹石(図16-2・3)

3点出土し実測は2点行っている。橢円形あるいは不定形の自然礫に1~数個の凹を有する。№50の凹石は使用が多かった様子。

(4) 石製品(図17-5・6)

長方形の石を長四角柱に磨をかけた製品で用途は不明である(第17-5)。長方形の石を半裁し、表面に磨きをかけ穴をあけようとした未完成品である。首飾りを作ろうとしたもので、石の中間ぐらいまで穴があいている。長さ4, 3cm、幅3cm厚さ1, 6cmを計り、片面に自然面が残っている(図17-6)。

(5) 磨石(図17-1・2・3・4)

小さな磨石がSK1より3点出土し、№28より1点の磨石が出土している。橢円形の自然石で全面あるいは片面に磨痕が残っている。

(6) 石皿(図18-1・2)

2点出土。皿部より周囲が1, 8cm程くぼんでおり、1/4が欠損し、凹部分が認

められる(図18-1)。もう1点は27, 0cm×19, 6cm、厚さ4, 4cmを計り、片面が磨かれた状態である(図18-2)。

D その他 (図版10 下段左側)

道路工事の際に盛り上げた土の表土付近から、炉に利用したと考えられる礫が出土し焼けているためにボロボロであったが、炉に使用した礫であろうと思われる。礫には土器や石が付着した状態で検出した。

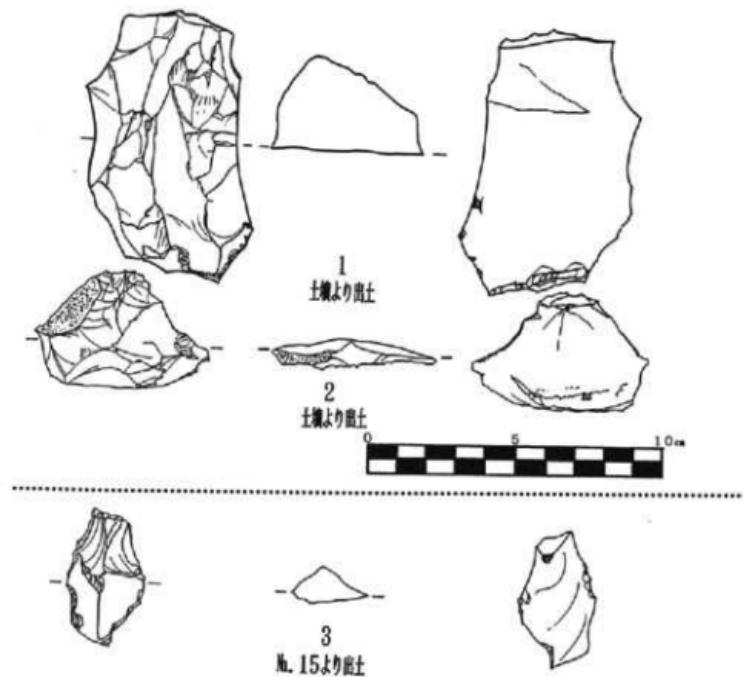
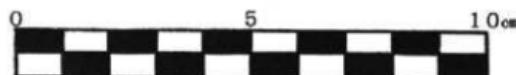


図15 石器・石製品実測図



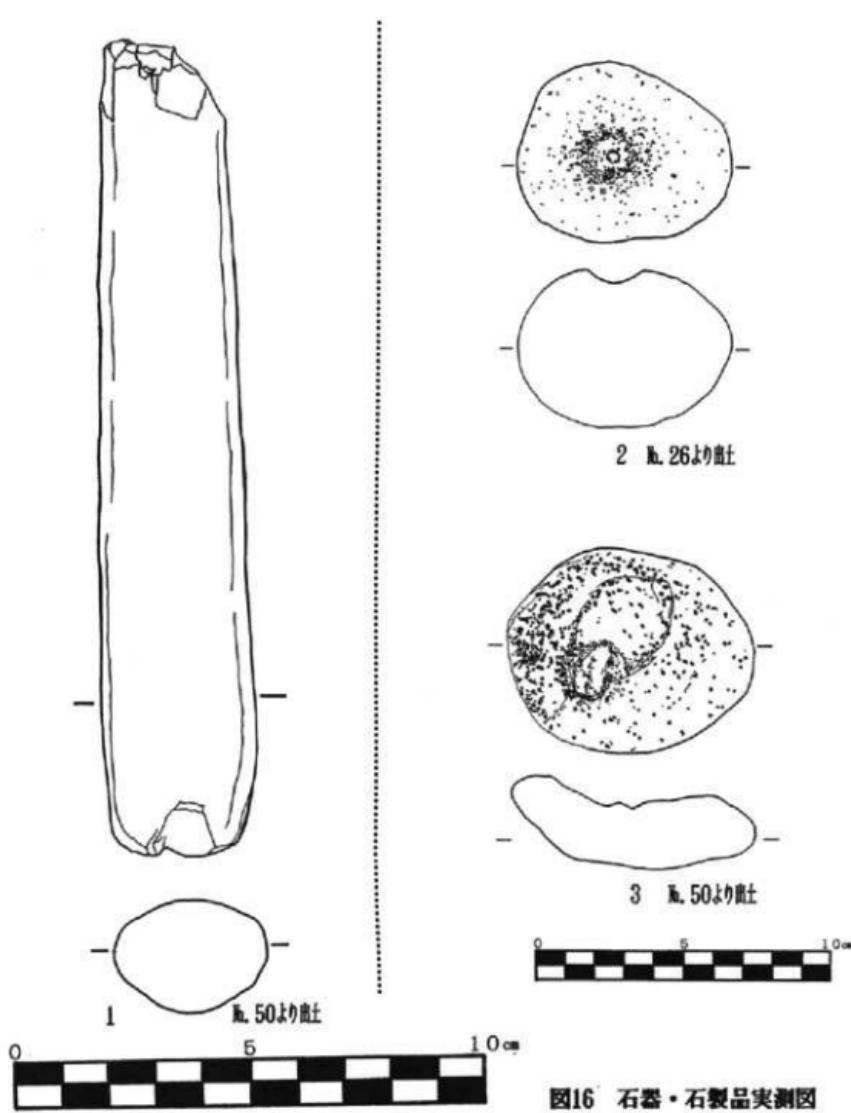


図16 石器・石製品実測図

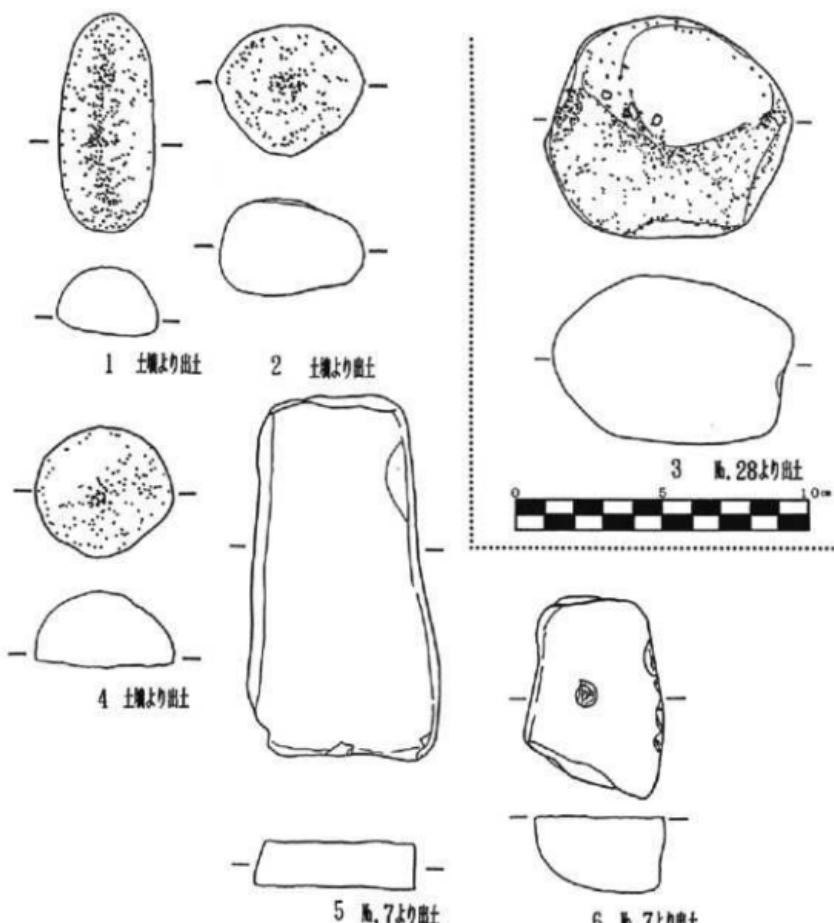


図17 石器・石製品実測図



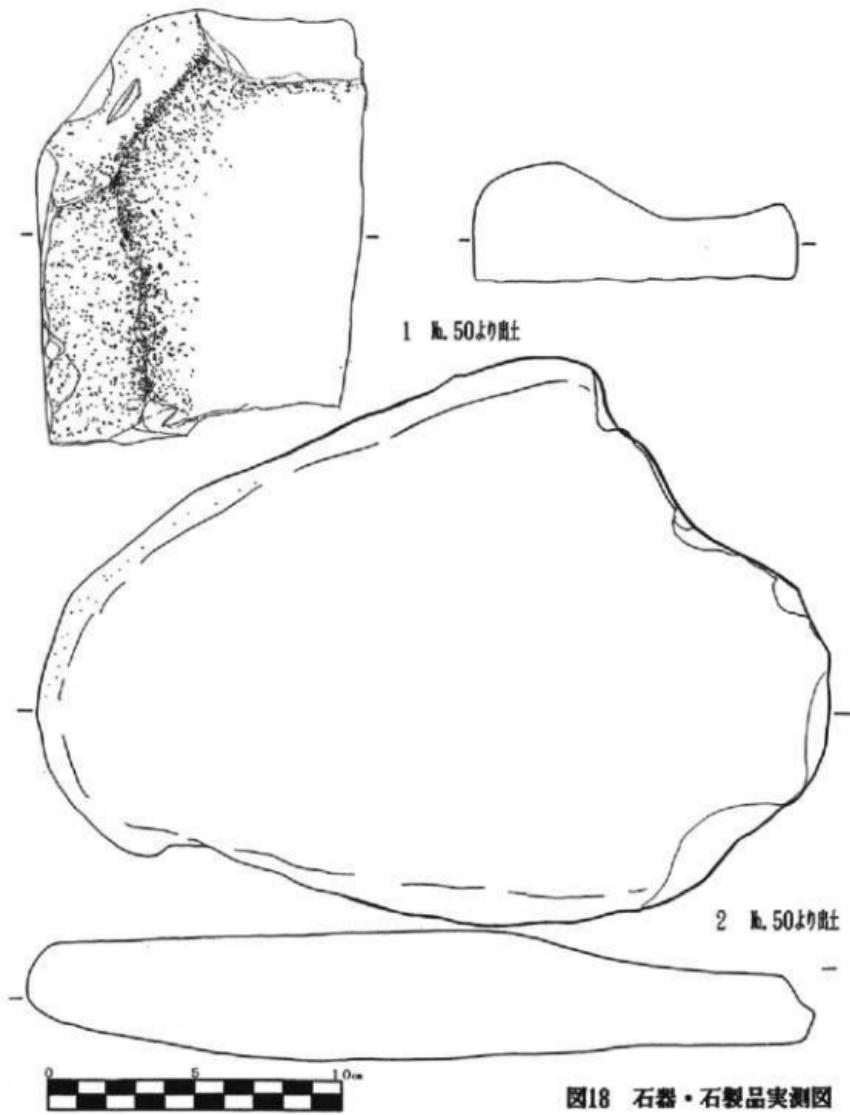


図18 石器・石製品実測図

▽ まとめ

中堀遺跡は、天正13年2月に天童氏の旗下の土豪滝口兵部らが堀を掘らせて陣を取った中堀館跡であるが、それ以前に縄文時代晚期を主体とした集落跡であった。今その緊急発掘調査は工事途中での調査であり、市道谷地中・東根線が拡幅されたことで断ち切られ、残された段丘で遺跡全体の端部であったために、面積的には小規模な調査になった。その中で竪穴住居跡1棟・土壙1基他の遺構が検出され、土器類や石器類の遺物も出土した。また中堀館跡の西端であり、曲輪がどの辺りまでなのか、曲輪は段丘を削平して盛土を行う方法で平坦にしたもので、自然の河岸段丘を上手に利用して築造していることが確かめられた。

縄文時代晚期の竪穴住居跡は、床面の部分に貼床が認められ、晚期的には大洞B C式併行期のものであることが判明し、土壙は大洞B・B C式併行期であった。その他の部分では、縄文時代後期末葉の新地4式併行期の土器が若干混じっていた。

出土遺物の中に、当時の精神文化や信仰の一端を探る資料として土偶や石剣などが出でている。土器については質や量とともに足りなかったために、文様の組成、形態分野をするに至らなかった。口縁部の破片については代表的なものについてのみ拓影図にした。土壙のF 2～F 3からは多量に一括して土器が出土しているが、復元するまでにはならず、部分的に接合するのみであった。出土遺物では、縄文時代晚期の遺物に混じって表土からは室町時代の陶器片や近世の陶磁器も出土しているが、本報告書では省略している。

山形県内で縄文時代晚期の代表的な例として、村山市作野遺跡・東根市蟹沢遺跡・羽黒町玉川遺跡・天童市矢口遺跡・米沢市八幡原No.2 4遺跡などがあり、縄文時代晚期の土器を編年でみる場合の基準的な遺跡である。また、本遺跡付近にも渡戸遺跡や森遺跡などがあり、立地や環境をみると同一的な条件に営まれている。

中堀館跡については、今後の調査研究に委ねることとして、本報告書で触れることを省略しておきたい。ただ、調査に制限があったが記録保存できたことは成果といえよう。



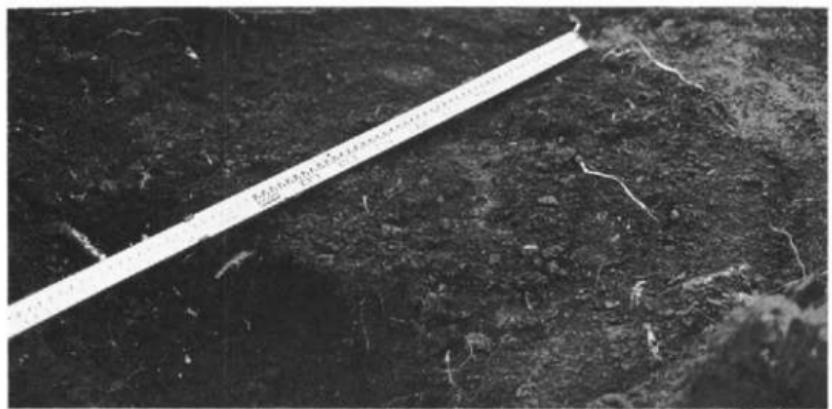
▲図版1 遺跡遠景



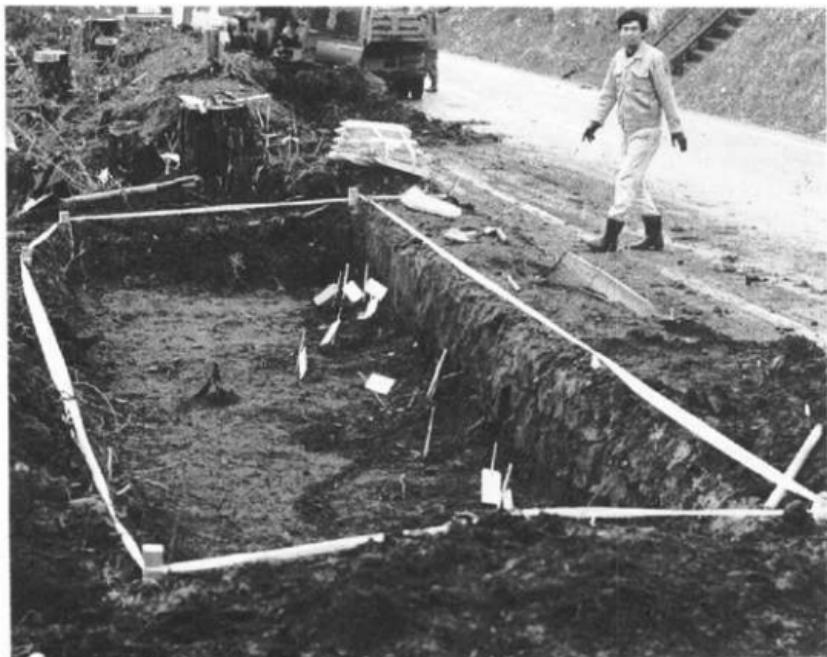
◀図版2 作業風景1



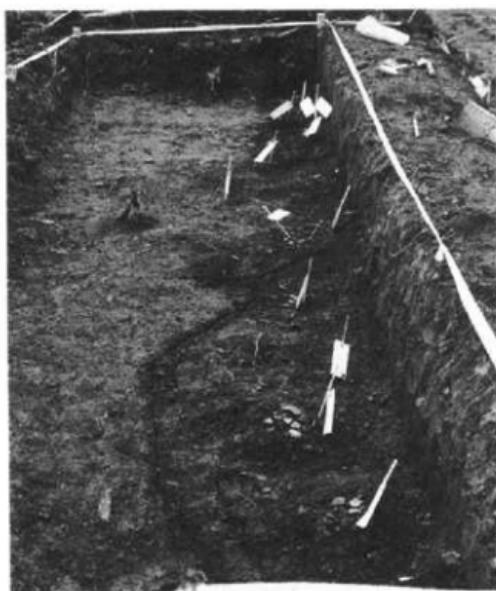
▼図版3 作業風景2



図版3 土壌

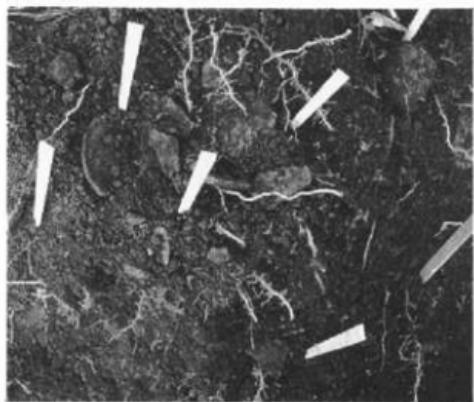


◀▲図版4 住居跡プラン





▲図版5 出土状況(土壤)



◀図版6 出土状況(No4-28)



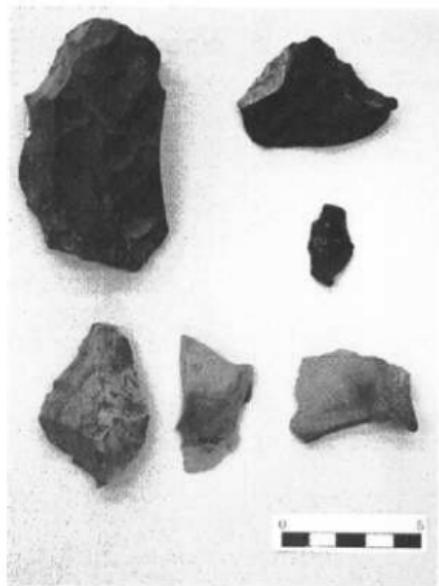
▼図版7 出土状況(No5-8)

◀図版8 出土状況(Cトレンチ断面)

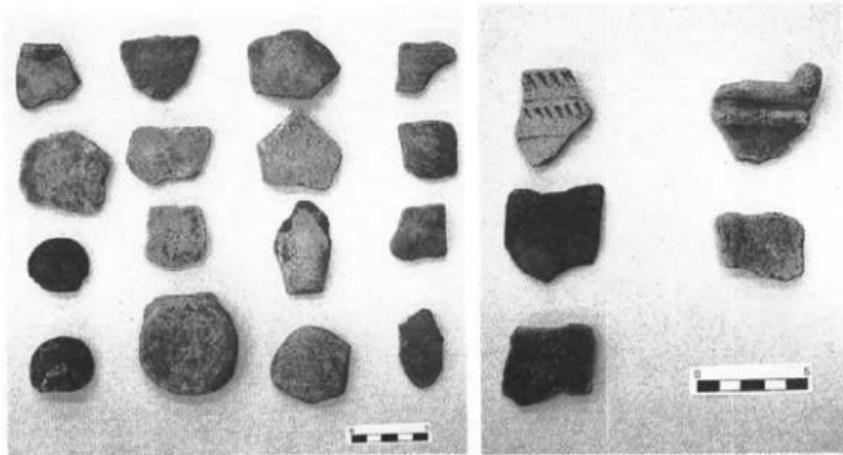
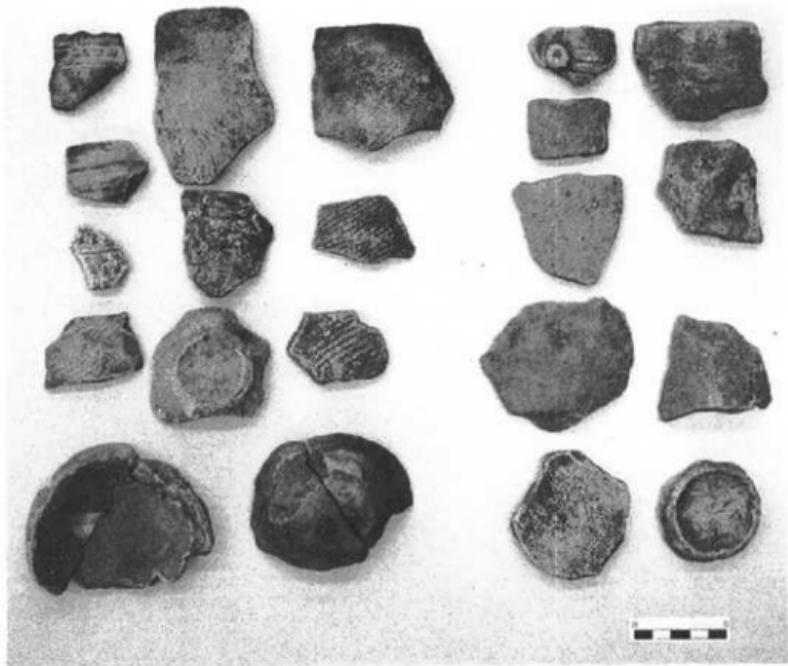


▼図版9 Cトレンチ





図版10 出土遺物(石器)



図版 11 出土遺物(土壤)



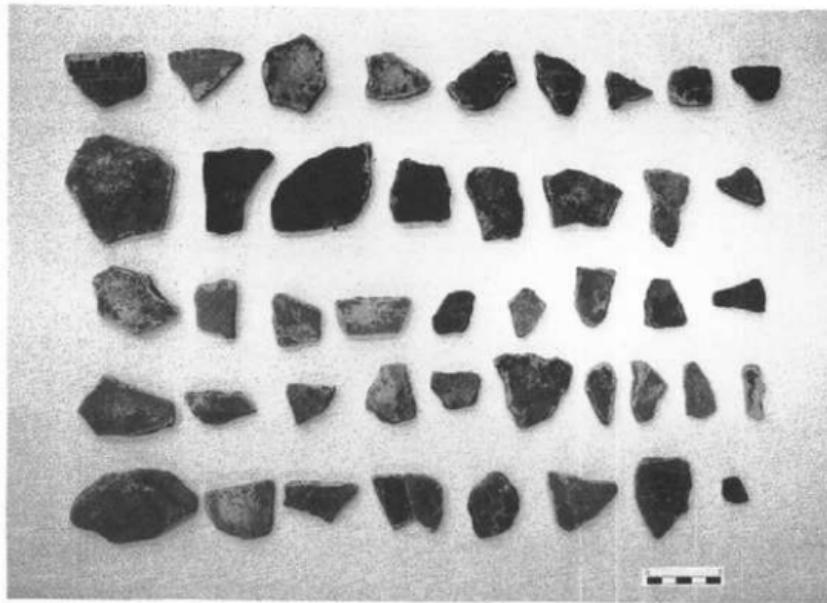
▲図版12 出土遺物(Bトレンチ)

図版14 出土遺物(住居跡)▶

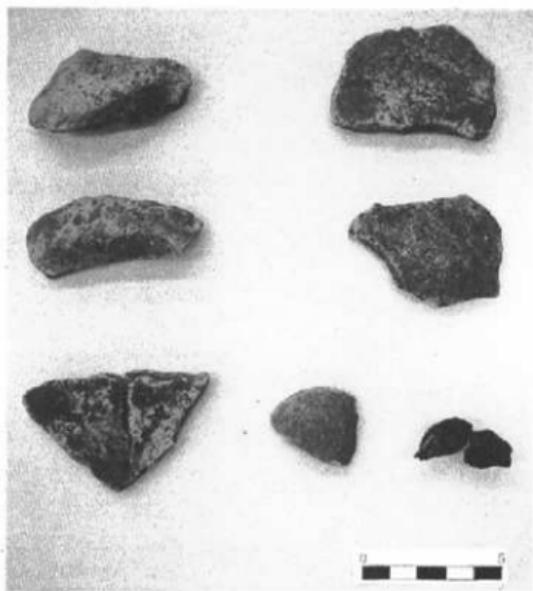


▼図版13 出土遺物(断面表土)

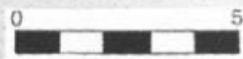




▲図版15 出土遺物(No24)



◀図版16 出土遺物(No1-9)



▲ ▼ 図版17 出土遺物(No27)



天童市埋蔵文化財調査報告書第7集

谷地中・中堀遺跡
発掘調査報告書

平成6年1月22日 印刷
平成6年1月29日 発行

発行 天童市教育委員会

印刷 豊田太印刷所



文化財愛護のシンボルマーク